

磯田道史の

ちよごと

家康み

第6話



2015年
徳川家康公
四百年
記念事業

開門！元目口

家康公は三方ヶ原の戦いで大敗した時、夕闇にまぎれて浜松城へ馬で逃げ帰りました。この時のことを家康公は後にこう回想したそうです。「わしが三方ヶ原から逃げ帰った時、(お供は)ようよう七人ほどしかいなかった。それも野原の中を走って逃げた」(寛元聞書)。途中までは、六、七十人の家臣がいたのですが、次々に脱落して、浜松城に着く頃にはお供は七人だけになっていました。家康公の逃げ足が速かったのと、敵の追撃が厳しかったせいです。

家康公は無事に浜松城の西門に着いたものの、なかなか城内に入れません。鳥居家中興譜には「家康公は三方ヶ原を退き(浜松城の)西の門よりは入られ

ず、遙に大手の門より門外に(馬を)乗廻し、東に向ひ北に至て、玄黙口(元目口)より(城内に)入られた」とあります。城の周囲をうろうろし、やつとたどり着いたのが、現在の市役所元目分庁舎(元西税務署)南西の元城町屋台置場の所。元目口でした。ここから南に向かう切通しの道は今も「古城」の雰囲気を残して、なんとも風情があります。この道こそ「家康公の出陣と生還の舞台」でした。私は、元目口のこの風情は浜松の宝だと思っています。開発で失われないうち祈っています。

家康公は元目口にたどり着いたものの門内に入るのに一苦労しました。「畔柳家記」という史料に、その様子が書かれています。家康の家臣が「開けてくれ。殿のお帰りである！」と叫んだのですが、門番の返答は、なんと、こうでした。「そんな小人数で殿(家康様)が帰ってくるはずがない。(お前ら偽物だろ

う)」。そういつて門番が門内に入れてくれなかったのです。家臣が「いや(本物の)家康様だ」と大声を張り上げ、門番は、家康公の顔を何度も確かめてようやく門を開いたとい

います。しかし、この後の家康公が偉い。門番を叱らず「門を容易に開かなかったのは門番として職務に忠実。立派だ」と、かえって褒美を与えたのです。「竹流し」という銀の延べ棒を与えたそうですから、しまり屋の家康公にしては大サービスです。家康公は「良葉は口に苦し」を肝に銘じ、自分に言いにくいことを言ってくれる家臣を大事にしました。へつらわらない「真の家臣」を育て使うのが上手でした。この人づくり人づかいのうまさ、家康公を天下人に押し上げたのです。

【次号予告】
おおくぼひこぞえもん
大久保彦左衛門との回想

徳川家康公顕彰四百年記念事業 関連イベント

「犀ヶ崖資料館」リニューアルオープン！

中区まちづくり推進課 ☎457-2779

建物の建て替えのため一時休館していましたが、4月1日(水)にリニューアルオープンします。ぜひお越しください。

所在地 中区鹿谷町25-10

開館時間 午前9時～午後5時

休館日 月曜日(祝日の場合は、翌日)

祝日の翌日、12月29日～1月3日

「三方ヶ原合戦立体総巻」が犀ヶ崖資料館に

美術館で先行公開し、好評だった(情景ジオラマ作家)山田卓司さん制作の作品を、犀ヶ崖資料館で公開します。

期間 4月1日(水)～7月下旬(予定)

